

# 土木屋の読書と旅 (21)

令和5年11月

「百聞は一見に如かず」ということわざがあるが、大抵の場合、百聞がなければ（事象についての関心や事前知識のインプットがなければ）何を見ればよいのかの焦点が絞れないのではないかと私には思える。中国古典「易経」の64卦中10番目は「觀」という卦であるが、角川ソフィア文庫\*では、卦の内容を説明する一文「觀国之光」について、これは国の光を見るときも読めるが、『観光という語の最も古い用例。もとより現代的な観光ではなく、その国の政治の良し悪しを民の暮らしに即して観察する意。』としている。 \*ビギナズクラシックス中国の古典：易経／三浦國雄／角川ソフィア文庫

今回は近いが遠い国、北朝鮮を2冊の本とインターネット資料（写真など）を使って旅してみたい。改めてわかったことではあるが、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)についてのビジュアルなガイドブックはなく、外務省ホームページにも国交がない国ということで一般的な資料は提供されていない。

参考情報として、NHK出身の吉田康彦『北朝鮮を見る、聞く、歩く』（平凡社新書、2009.12.15）に



よると「外国旅行者の立入り禁止地域」として『北朝鮮では住民に移動の自由はなく、地元の党組織の許可なく、首都平壤にも自由に旅行はできない。外国人が訪問できるのも、首都と平壤のほか、開城、元山、沙里院、妙香山、南浦、新義州、羅先などの観光地と主要都市に限られる。』としている。モデル旅行を想定すると、北朝鮮旅行は国内では朝鮮総連傘下の「中外旅行社」が独占的に扱っており、他の代理店を利用しても同じようなコースになる。外国人専用ホテルは高麗ホテル、羊角島ホテル、普通江ホテル、平壤ホテルなどがあると紹介している。

\* \* \*

『ピョンヤンの夏休み～わたしが見た「北朝鮮」(講談社 2011.12.19 第1刷)』  
柳 美里(ゆう・みり)：「東京キッドブラザース」入団『魚の祭り』で岸田國土戯曲賞を最年少で受賞。97年「家族シネマ」で芥川賞受賞。



『日本と国交のない国へ行ってた…』で始まる、自分のルーツを確信する心情を綴った紀行文学のような本である。2008年10月から2010年8月までの秋、(冬：1回目の後日談)、春、夏3回の北朝鮮旅行記でもある。以下に、わたしの心に残った箇所を抜粋・要約してみたい、多少長くなるが読後感を頭の中で整理して伝えるためには必要なことと諦めてもらいたい。

## <第1章 初訪朝～わたしが見た、幻の祖国>

『平壤国際空港で入管に任意提出させられる旅行日程の書類に書き込んだ渡航目的は、祖国訪問。「柳さんは北の人ですか」と質問されるが、わたし(彼女)の国籍は大韓民国。では何故、祖国訪問なのか？祖父が日本に渡った時、朝鮮半島は南北に分断されていなかったし、祖父は共産主義者の嫌疑をかけられて投獄、弟は南労党青年組織の幹部で南軍に射殺されなければ、兄弟で北へ行ってた可能性もあるのではないかと、思うからだ。』と記している。『共和国では、観光目的であれ、取材目的であれ、旅行者が(在日朝鮮人や中国の朝鮮族も同様)勝手に外出することは許されていない。必ず、どこでも、案内人が同行する。』今回の案内人は朴承一さん、その上司の趙ヒドゥさん(3回とも)、金雪花さん(女性、3回目から加わる)。滞在したホテルは高麗ホテル(1回目)、平壤ホテル(2, 3回目)。

趙さんから示されたスケジュールは万寿台、凱旋門、牡丹峰、板門店など著名な観光コースと朝鮮作家同盟委員会、海外同胞援護委員のメンバーとの会見・会食。大同江ほとりのジョギングを希望するが

# 土木屋の読書と旅 (21)

令和5年11月

案内人が同行できないからという理由で平壤市内を走ることは許可されなかった。

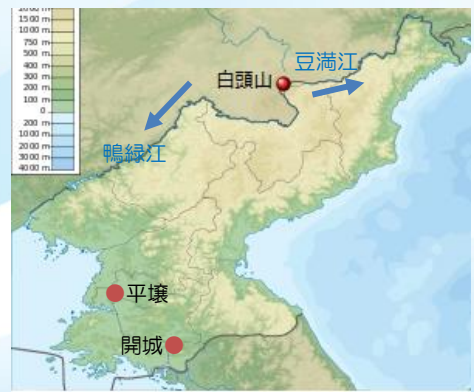
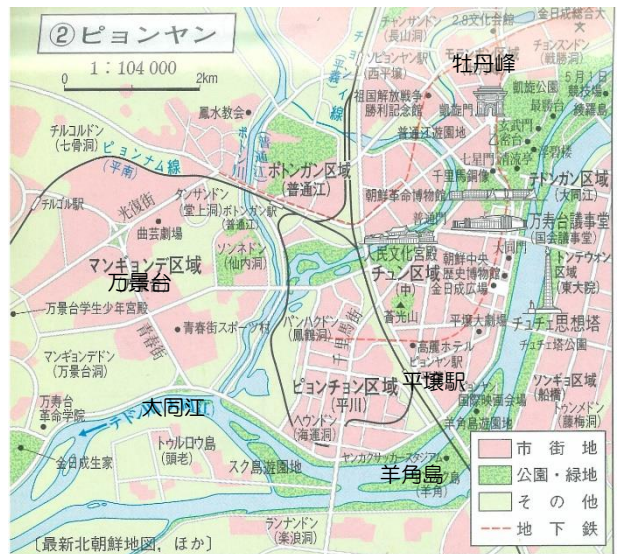
“ホテルから「観えた光」として彼女が目にしたものは、『通りの真ん中に、青い制服を着た女性が立っている。ここ朝鮮には、信号も横断歩道橋もない。要所要所に彼女たちが立っていて、軍人みたいなきびきびした動作で交通整理をしている。』『子供たちは校門をくぐって、校庭を横切っていく。それらの風景をカメラにおさめた瞬間、観光という言葉が胸の内に閃いた。観光の語源が、中国の古典『易経』のなかにある「観国之光（国の光を見る）」だということのを思いだした。わたしは、祖国の言葉が分からない。街を歩いて、行き交う人の声を聴いても、なにを話しているのかはわからない。声の響きを聴くことしかできない。顔や姿を見ることしかできない。光を観ることしかできない。』

## <第3章 太陽節国際マラソン大会—8月の果て>

『この国には、たくさんのサラム(ひと)がいる。……ひとりひとりの朝鮮サラムの姿は、日本にいと想像すらできない。イルボンサラムの多くは、「北朝鮮」という敵意で固められたひとつの大きな集合体だと思っている。国家対国家とか民族対民族の問題で捉えると見失ってしまう固有の生と固有の死を持つひとりひとりのサラムの顔と、自分の顔を突き合わせるところから問題を出発させたかった。』

## <第4章 家族と故郷—息子を連れて>

事前予約が取れず、ガイドと通訳がいないと現地で身動きが取れないので、朝鮮大学校のご厚意に甘えてバスに同乗させてもらい、家族で白頭山に向かう。『バスの中は賑やかだった。在日韓国・朝鮮人である彼らは、祖国ではウリマル(わたしたちの言葉)を使おうという気概があるのだろう、おしゃべりの大半は朝鮮語だったが、ときどき、めっちゃがめついやん! そんなヤツおれへんやろ! などと関西弁が混入するのが絶妙におかしかった。』『白頭山は中国と朝鮮の国境に連なる十六の峰々からなる長白山脈の最高峰である。…朝鮮最古の王朝の始祖「檀君」が白頭山に棲む山上の子孫だとされていることから、「白頭山」は朝鮮民族の霊峰、国家鎮護の聖山として古来崇められてきた。…だが、一六〇六〜一六〇九年まで中国全土を統治していた清王朝も民族発祥の地を白頭山としていることから、李朝と清朝の間でしばしば国境をめぐる紛争が起っていた。一九六二年、金日成主席と周恩来主席が話し合い、天池の真ん中を中朝の国境線とすることを定めた。』『天池一噴火口に水が溜まってできたカルデラ湖—西側へは朝鮮最長の鴨緑江が流れ、東側へは豆満江という大河が流れている。この二つの川が、朝鮮と中国、ロシア連邦の国境をなしているのだ。』

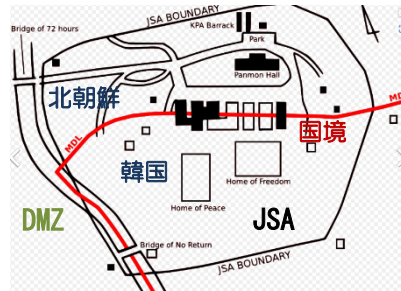


南北の境界線にある板門店も観光コース(第1回及び第3回で訪れている)であり、平壤~板門店は約

# 土木屋の読書と旅 (21)

令和5年11月

215 kmで日帰りできる距離。JSAには北側からの方が入りやすいと言われているが、そもそも北朝鮮に入国すること自体が難しい。ここで、DMZ（非武装地帯 DeMilitarized Zone）とは境界線を中心に幅4 kmの



地帯、JSA（共同警備区域 Joint Security Area）は板門店にある境界上の総合警備地域のことであり、上図では赤線が国境、黒枠がJSAで黒色の建物が北朝鮮、白色が韓国と国連が管理している。

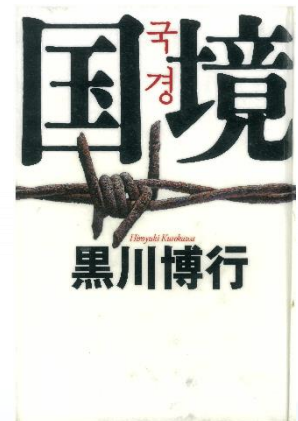
韓国映画「JSA」では韓国兵士イ・ピョンホン、北朝鮮兵士ソン・ガンボ、スイス将校イ・ヨンエの配役で大ヒットし、日本でもその存在が広く知られるようになった。近年では、韓国財閥の令嬢がパラグライディング中に急な天候不良で南北の境界エリア近くに墜落し、軍人たちの追及に方向感覚を失い、たどり着いたところが北朝鮮の開城の村だったことから始まるラブロマンスコメディ『愛の不時着』が大ヒットした。



\* \* \*

『国境（講談社2001年10月）』黒川博行：『キャッツアイころがった』でサントリーミステリー大賞、『国境』は直木賞候補に挙がるが受賞できず、同じシリーズの『破門』で直木賞を受賞。主として大阪を舞台に、大阪弁による軽妙なやりとりが効果的な作品群(他に大阪府警シリーズ等)のある作家。

『国境』は建設コンサルタントの二宮と二蝶会幹部の桑原コンビが活躍する、本の帯によれば関西風味ハードボイルド「疫病神シリーズ」の最高傑作ともいわれる第2作である。\*注：誤解があると困るので解説しておくが、ここに登場する建設コンサルタントとはわれわれの属する建設コンサルタント（測量・調査・設計の会社）とは異なり、都市部の建設工事で発生するゆすり、たかり、嫌がらせによる工事妨害など、ヤクザをつかってヤクザを抑える事前仕事を業界では「前捌き」といい、このサバキを二蝶会へつないでいるのが建設コンサルタントとしての二宮という設定である。年齢的には桑原が二宮の3歳上。



『国境』は平壤順安空港へ向かう高麗民航の機内での会話から始まる。二宮は重機の輸出で、桑原は組の若頭がカジノ建設の投資話で詐欺にあい、北朝鮮に高跳びした趙成根を追っての活劇である。

黒川の作品ではその時代の社会問題をベースに取り上げることも多く、巻末に参照された資料が示されているが、本作『国境』では北朝鮮関連の49冊の参考文献、朝鮮語監修、北朝鮮の国内事情は山梨学院大学教授、貿易実務については元三井物産社員、現地取材、資料収集等においては小説現代担当者の協力を得たことなどが明示され、明確な根拠をもって小説が執筆されたことが分かる。したがって、平壤での状況は前述の柳美里『ピンヤンの夏休み』とよく一致する。

北朝鮮での活動範囲は2段階に分かれる。1段目は正規のルートで訪朝し、探索活動先は平壤市内、宿泊先は大同江にある羊角島ホテルである。昼間はお仕着せの市内観光ルート、夜はカラオケなどで案内員の目を盗んでゴロツキ集団の情報網を金で買い、趙を探すが直前のところで取り逃がす。平壤発の

# 土木屋の読書と旅 (21)

令和5年11月

長距離列車で咸鏡北道の経済特区羅津・先鋒地域へ逃げた可能性が高いことが分かる。こうした動きを追体験しようとするとしても平壤市街地の街路名や観光対象施設が示された地図が必要であるので県立図書館で司書に調べてもらったが、北朝鮮の全域地図はあるが市街地地図はなかった。

2 段目は正規の手続では再入国に時間がかかりすぎるため延辺朝鮮族自治州から北朝鮮へ密入国しての探索となる。

北京→延吉→図們(国境の町)→琿春(国境越え)→先鋒→羅津→会寧(趙成根を確保、一部資金回収)→豆満江(渡渉：国境警備隊の襲撃で負傷)→図們→琿春→北京

この本のタイトル『国境』について、文庫本の解説者：藤原伊織も指摘しているが、中国との国境近くでの主人公ふたりの会話はある意味で真実をついているのかもしれない。

「国境で、いったい何ですかね」二宮は桑原にいった。「国と国との縄張りの境目や。地図に線ひいとるやろ」「一筋の川を挟んで、こっちは豚の飼料を食い、あっちは豚の肉を食うてる。なんか知らんけど、俺は割り切れへん」「それが縄張りというもんやないけ。組長が縄張りをきっちりまとめてたら、ええシノギにありつける。縄張りがバラバラやったら、ほかの組に食われるんや」「けど、この国は中国やロシアに食われてない」「下手に食うたら腹痛を起こすやろ。縄張りにも、食うてええとことわるいところがある」「シンプルですね」「朝鮮半島の地図を見てみい。国境は38度線挟んで適当に線を引いただけや。それで北朝鮮と韓国は同じ民族でありながら、提灯と釣り鐘になってしもた。そのときどきの喧嘩の強さで上にも下にもずれるんや」 \*参考\* 「提灯に釣り鐘」：形は似ているが重さが比べものにならないほど違うところから、釣り合わないことのたとえ。(集英社国語辞典)

\* \* \*

何気なく読んだ10月28日付朝日新聞の読書欄で一冊の本の書評が目にとまった。『空間の未来』ユ・ヒョンジュン<著>クオン/2200円である。著者は韓国弘益大学校建築都市学部教授、韓国の気鋭の建築家だそう。書評(立教大学准教授・福島亮太)では『…異なる階層を共存させるソーシャルミックスの場としては、公園が必須である。都市の無秩序な拡張を抑える「グリーンベルト」を真に緑化すれば、住民は公園に格段にアクセスしやすくなるだろう。さらに、この融和的な公園のデザインを応用して、北朝鮮との間の非武装地帯(DMZ)を線形の田園都市とし、南北の交流の場に変えようという提案は面白い。』とある。昔からある都市計画上のグリーンベルトの概念をこのように捉えなおす発想は韓国ならのものではないかと得心した。



古谷 健

